

研究ノート

新潟陽性者ピアミーティング「らっくら」取組報告

藏田 裕, 川口 玲, 渡邊さゆり, 古谷野淳子,
中川 雄真, 三浦かおり, 田邊 嘉也

新潟大学医歯学総合病院感染管理部

目的: 新潟県内初の陽性者ピアミーティング (以下, PM) を開催することで交流の機会を創出し, 陽性者支援に資する。

対象・方法: I 期: 県内拠点病院を受診する陽性者 94 名に, 県内 PM 開催のニーズをアンケート調査し, 県内拠点病院と情報共有しながら開催に向けて準備を行った。

II 期: 2014 年度の第 1 回から, 2015 年度までに計 3 回新潟陽性者 PM「らっくら」を開催し, 参加者全員にアンケート調査を実施した。PM のプログラム内容やアンケート結果について検討した。

結果: I 期: 県内開催 PM への参加意向は, 「参加したい」「どちらでもない」が各 29%, 「参加したくない」が 40% だった。他地域で少数での開催例もあることから, 県内開催のニーズは十分であると推察し, その後ルールや運営案の策定に着手した。

II 期: 2015 年度までに 3 回の「らっくら」を開催, 計 25 名の参加を得た。ゲイ男性向け PM は毎回, 属性を問わない誰でも参加可能な PM は初回のみ実施した。参加後の感想は 76% から「期待通り」または「まずまず期待通り」の回答であった。

考察: 参加後アンケートの結果やリピーターの存在から, 参加者は一定以上の満足を得ていると推察される。しかし, プライバシーへの懸念から参加を見合わせている陽性者の存在といった課題もあることから, より安心して参加可能な PM を模索する必要がある。

キーワード: 陽性者支援, ピアミーティング

日本エイズ学会誌 19: 97-102, 2017

序 文

陽性者は病気による制約感を感じることや HIV を理由とした本意な退職等の差別を回避する行動をとることが少なくないとされる¹⁾。また, HIV のみならず他の STD, およびセクシャリティについてカミングアウトしていない, あるいは相談できる相手がないケースも少なくない²⁾。そのような陽性者への支援の一つとして陽性者同士の交流であるピアミーティング (以下, PM) の有用性が報告されている³⁾が, 開催されている地域は限られている。当院の所在する新潟県は PM の開催がないだけでなく, NPO 等の HIV 陽性者支援団体も現状存在していない。そのため新潟県在住の陽性者が陽性者同士の交流を希望する場合には, SNS サイト等での出会いを利用, もしくは他地域で開催の PM 等のイベントに参加する必要がある⁴⁾。実際に当院でも他地域開催の PM を紹介した経験がある。

しかし, 前者は性行為等を目的とした出会いにつながることも少なくなく⁵⁾, 後者は交通費や移動時間の関係で地方の陽性者が利用するにはハードルが存在する。そこで, 北陸 HIV 情報センターや沖縄臨床心理士会がケアサポー

トや PM の支援を行っている先例も踏まえ, 県内拠点病院の HIV 診療従事職主導により新潟県内における PM 開催の可能性を検討することとした。患者会等の育成・指導は医療ソーシャルワーカー業務指針にも定められている⁶⁾ ことも取り組みに着手した契機の一つである。

まず実際に新潟県内で PM のニーズが存在するのか確認の調査を行い, ニーズの確認後に PM 開催に向け実際の取り組みを開始することとした。そして, 実際に PM を複数回開催することができた。今回, PM 開催までの過程についての報告に加え, さらに今後のよりよい PM の場の創出を目指し改善を図るため, 参加者にアンケートを実施, その結果についての検討も報告する。

対象と方法

準備段階から実際の開催まで長期間にわたり, その間の取り組みで対象と方法も異なる期間があるため, 二期に分けて報告する。

I 期: 新潟県内の PM 開催のニーズ把握と PM 開催に向けた準備期間 (2013 年 7 月~2015 年 3 月 14 日)

2014 年度の新潟県エイズ治療拠点病院連絡会議 (以下, 県連絡会議) にて新潟県内での PM 開催のニーズ調査について同意と協力を得ており, 新潟県内のエイズ治療拠点病院を受診している陽性者 (2013 年当時 94 名) を対象にア

著者連絡先: 藏田 裕 (〒951-8520 新潟県中央区旭町通 1-754 新潟大学医歯学総合病院感染管理部)

2016 年 6 月 30 日受付; 2017 年 1 月 13 日受理

ンケート調査を実施した。直接陽性者への手渡しでのアンケート配布および内容説明を各拠点病院診療スタッフに依頼、7月から10月末までをアンケート配布および回収期間とした。回答は無記名郵送式で回収している。アンケート結果は2013年度の県連絡会議にて各拠点病院と共有している。その後、筆者はぶれいす東京の「地域における当事者のためのプログラム・スタディ・ツアー」研修に参加したほか、全国各地のピアミーティング開催団体に問い合わせを行い、それらを参考にしながら「らっくら」の約束事（ルール）や運営案を策定した。

Ⅱ期：実際にPMを開催した期間（2015年3月15日～2016年3月末）

2015年3月25日に新潟市内で第1回「らっくら」を開催して以降、2015年11月7日に長岡市内で第2回、2016年3月6日に新潟市内で第3回とこれまで計3回の「らっくら」を開催しており、この期間をⅡ期とする。「らっくら」は1度の開催に、①属性を問わず誰でも参加できるミーティング、②女性のみ参加できるミーティング、③ゲイ男性のみ参加できるミーティングの3種類のミーティングを毎回募集し、うち2名以上の参加者の集まったミーティングをその回に開催することとしている。

ミーティングには進行役およびスタッフとして県内拠点病院の診療スタッフ（MSWや臨床心理士）が2名つき、1ミーティングにつき1.5時間（第1回開催のみ1時間）で開催している。ミーティングの大まかな流れとしては、自己紹介およびアイスブレイク（5分程度）、約束書の読み合わせ（5分程度）と進め、その後ミーティングを開始した。ミーティングでは特に初回参加者から多く発言してもらえるよう留意している。基本参加者同士のやりとりが中心だが、話が停滞したときは適宜スタッフがファシリテートしている。

第1回は、①4名、③7名、第2回は、③6名、第3回は、③8名の参加者を得ている。今後の運営の改善のため、参加者には終了後アンケート調査を実施、無記名で退室時直接回収を行った。

結 果

Ⅰ期にて実施したアンケート調査は回収率59%であった。10代こそいないものの20～70代まで幅広い世代から回答を得た（図1a）。PMを知っているかとの問いには、「知っている」46%、「知らない」47%とほぼ同数で、「聞いたことがある」が7%だった（図1b）。県内PMへの参加意向については、「参加したくない」が40%で最多だったが、「参加したい」「どちらでもない」がそれぞれ29%の回答を得た（図1c）。他地域ですでに開催しているPMの中には2～3名と少数の開催のものもあると各実施団体

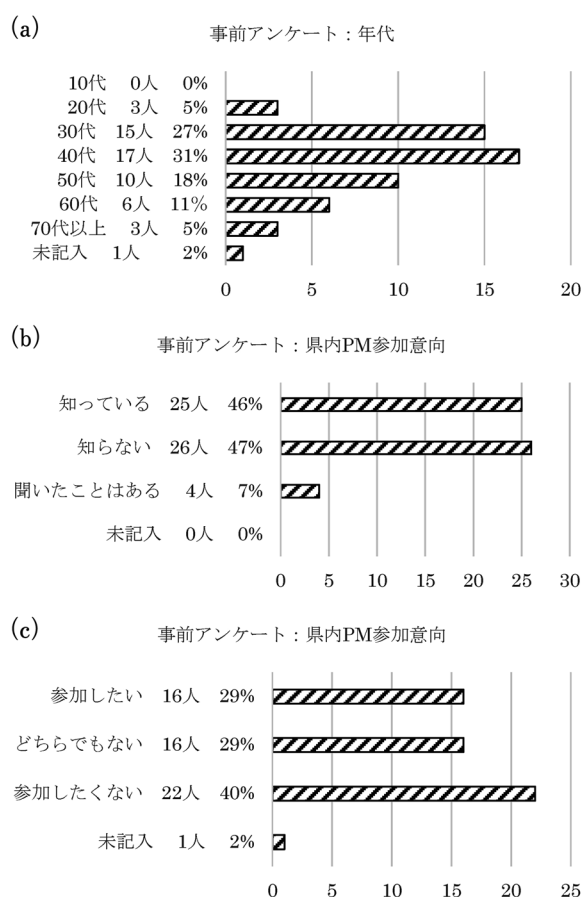


図1 新潟県内拠点病院通院陽性者を対象とした県内PMのニーズ確認アンケート（N=55）

への問い合わせで確認しており、それに照らし合わせると、10名以上の参加意向があるため新潟県内でも十分PM開催の余地はあると推察された。結果は2013年度の県連絡会議で共有、県内PMの開催に向け実際に活動を開始することに理解と協力を得られた。他地域のPM実施団体の運営の情報収集を行い、参考にしながら新潟陽性者PM「らっくら」事務局を立ち上げた。「らっくら（しる）」とは、新潟弁で「ほっと・安堵（する）」という意味であり、PMが陽性者にとってそういった場になればとの願いを込め命名した。事務局には筆者のほか県内拠点病院の診療スタッフに参加し、「らっくら」開催当日のミーティング運営にも関わっている。開催案内は県内拠点病院診療スタッフに配布を依頼しており、おもな参加対象として県内在住の陽性者を想定しているが、ホームページや陽性者支援サイトでも広報しており、県外からの参加も受け付けている。参加決定者以外には開催場所は非開示とした。

Ⅱ期とした第1回開催以降について述べると、「らっくら」当日は2名以上の運営スタッフがPMのサポートを

行っている。時間は一つのミーティングにつき第1回は1時間だったが、時間不足との声があり、第2回より1ミーティングにつき1.5時間で運営している。「らっくら」終了後のアンケート回収率は100%である。ここでは合計した集計結果について述べる。各ミーティング個別の結果については図2にて確認いただきたい。

参加者の性別は「男性」(100%)で、世代構成は「30代」(8%)、「40代」(40%)、「50代」(8%)、「60代」(28%)、「70代」(16%)と40代以上の中高年齢層が多数を占めた(図2a)。住まいの地域については第2回から聴取、新潟県は県北から「下越地域(中核都市:新潟市、今回は佐渡も含めた)」「中越地域(中核都市:長岡市)」「上越地域(中核都市:上越市)」に大別され、新潟市から上越市の距離が約130kmと南北に長く広がっているが、参加者の住まいは「下越地域」(57%)、「中越地域」(43%)で、「上越地域」および「県外」からの参加者は第3回終了時現在ではなかった(図2b)。「らっくら」を知った契機は「医療機関から」(96%)、「「らっくら」ホームページから」(4%) (図2c)であった。

他陽性者との交流経験(複数回答)は「メール・相談電話・文通等」が最多だが、2回目以降「「らっくら」参加経験」が数字を伸ばしてきている(図2d)。

参加前の不安(不安がある場合は複数回答)は「とくになかった」(48%)が半数近くを占める一方、「知り合いに合う不安」(25%)、「プライバシーの不安」(16%)、「うまく話せるか不安」(16%)等不安を抱えての参加もみられた(図2e)。参加後、その不安は「問題なかった」(44%)、「少し気になった」(16%)、「かなり気になった」(4%)「元から不安なし」(8%)となった(図2f)。

ミーティングにて話したかったこと、期待していたことは多岐にわたるが、その場や終了後の交流を期待する回答が一貫して多い一方、徐々に具体的な相談希望も増加傾向にある(図2g)。

参加後の満足度(第2回より聴取)については、「とてもよかった」「まあまあ良かった」で71%、「普通」7%、未回答22%で、「あまり良くなかった」「良くなかった」は0%であった(図2h)。

考 察

I期におけるニーズ確認のためのアンケートの結果から、新潟県内にもニーズは存在すると推察し、「らっくら」を立ち上げた。PMの認知度が陽性者の半数程度のなか、これまで計画した3回とも参加希望者が集まり開催できていることから、新潟県内開催のPMにニーズが存在していた、あるいはアンケートによりPMのニーズを喚起したと言えるのではないかと。

II期における「らっくら」参加者アンケート結果では、参加者属性は「男性」(100%)で、世代構成は「30代」(8%)、「40代」(40%)、「50代」(8%)、「60代」(28%)、「70代」(16%)と40代以上の中高年齢層が多数を占めた。I期で行ったアンケートで多かった世代は40代>30代>50代だったので、「らっくら」参加者の年齢層とは相違がみられる。

20代や30代の若い陽性者の参加が少なかった理由として、中高年の陽性者よりも、「知り合いに会うのではという不安」「プライバシーの不安」といった不安を強く感じている可能性を筆者は推察しており、今後検証が必要である。

加えて、拠点病院の診療スタッフから、プライバシーへの懸念から参加を希望しても最終的には参加を見送っている陽性者がいると報告を受けている。したがって今後新規申込者・リピーター双方とも参加しやすい相談・交流の場を目指すため、プライバシーへの配慮は重点課題である。これまでもプライバシーへの配慮として、他の参加申込者の属性(性別、年代および居住地域を申し込み時任意で聴取)を申し込み締め切り前に確認して参加を最終決定できるように変更(第2回より)、プライバシーポリシーを策定する(28年度開催の第4回より)など適宜運営案の改訂を行っている。より参加しやすい場、より「「らっくら」する場」の創出を目指すことで、今後も継続して開催することができると考える。

また、参加前の不安として他に「うまく話せるか不安」「期待する内容になるか不安」といった回答もあり、それに対しては、新規参加者に配慮した議事進行の心がけ(第2回より)、座席配置の変更(第4回より)といった見直しを行っているが、こちらも引き続き改善を検討していく予定である。

「らっくら」を知った契機は「医療機関から」が96%であり、陽性者の利用できる社会資源が希薄な新潟県のような地方では、拠点病院等医療機関の協力を得ることが重要であると考えられる。ホームページ等でも広報を行っているが、ネットリテラシーは個人差があり、陽性者に確実に広報を行うという点で医療機関からの支援は必須といえそうである。今回の取り組みでは診療スタッフが「らっくら」事務局としてかかわっている点のほか、県連絡会議を通し各拠点病院とニーズ確認アンケート等情報の共有や協力の受諾を取り付けることができたことが大きかったのではないかと。

「らっくら」で話したかったこと、期待していたことについては多岐にわたり、その場に携わった一人としては1.5時間のミーティング内ですべてを取り扱うことはできていないのではと感じている。ただ参加者の満足度では

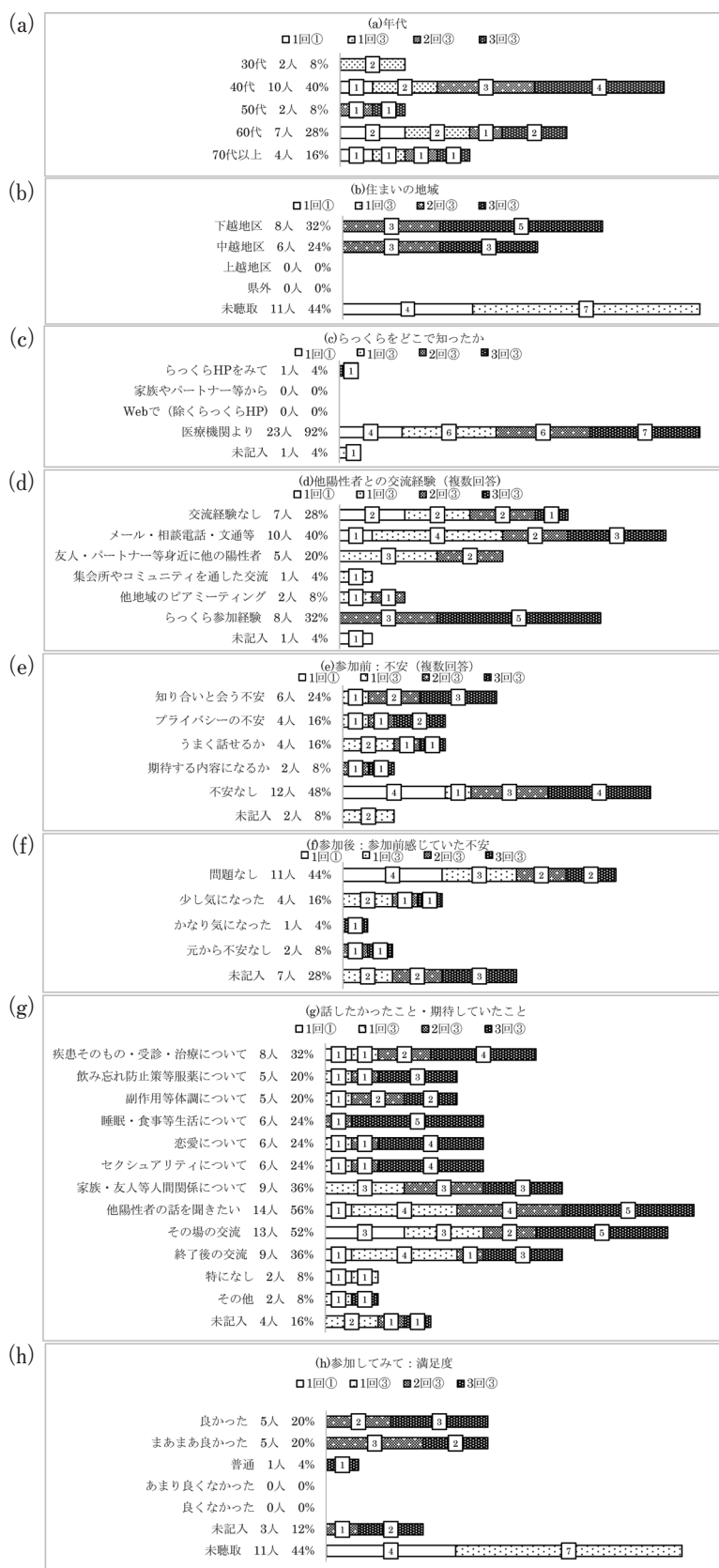


図 2 「らっくら」全3回4ミーティングでの終了後のアンケート結果 (N=25)

「あまり良くなかった」「良くなかった」回答はなく、参加者は一定以上の満足度を得ており、これまでと同様に参加者メインのミーティングの継続を目指していきたい。

これまでに下越地区および中越地区で3回開催するなか、毎回参加しているリピーターも存在する一方、毎回新規の参加者もあり、「下越地区又は中越地区」の「男性」陽性者にはある程度受け入れが進んでいると思われる。今後「上越地域」の陽性者や「女性」の陽性者にも興味を持っていただけるよう、前述のような改善のほか、開催場所や日時の検討もあわせ行っていく予定である。

利益相反: 本研究において利益相反に相当する事項はない。

文 献

- 1) 若林チヒロ: HIV 陽性者の生活と社会参加に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 平成 26 年度総括・分担研究報告書, 79-187, 2015.
- 2) 高嶋能文: 地方公共団体と NGO による HIV 対策の実践を活かした検査相談体制ならびに個別施策層への啓発普及の充実. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 地方公共団体及び NGO 連携による個別施策層を含めた HIV 対策に関する研究 平成 25 年度総括・分担研究報告書, 85-153, 2014.
- 3) 山崎厚司: HIV 陽性者ケア等に関する NPO/NGO の連携に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究 平成 24~26 年度 総合研究報告書, 263-280, 2015.
- 4) HIV マップ. <http://www.hiv-map.net/navi/peer-support/>
- 5) 日高庸晴: インターネットによる MSM の HIV 感染リスクに関する行動疫学研究—REACH Online 2014—. 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究. 平成 26 年度総括・分担研究報告書, 9-35, 2015.
- 6) 社団法人日本医療社会福祉協会: 医療ソーシャルワーカー業務指針. 2002.

An Activity Report of Peer Meeting Named “Rakkura” for People Living with HIV/AIDS in Niigata

Hiroshi KURATA, Sato KAWAGUCHI, Sayuri WATANABE, Junko KOYANO,
Yuma NAKAGAWA, Kaori MIURA and Yoshinari TANABE

Division of Infection Control and Prevention, Niigata University Medical and Dental Hospital

Purpose : The purpose is to contribute to support for people living with HIV/AIDS by holding peer meetings (hereinafter referred to as PM) , which is the first time for Niigata prefecture.

Methods : Period I : We conducted survey questionnaires targeted for 94 HIV positive people visiting a HIV/AIDS specialist hospital in Niigata prefecture in 2013 if they were interested in participating in the PM in Niigata. Then we prepared for holding while sharing information with AIDS treatment core hospitals in Niigata. Period II : We have conducted survey questionnaires targeted for all participants of the PM named “Rakkura” which was held three times by fiscal year 2015. We considered the program contents of PM and a questionnaire result.

Result : Period I : Regarding the participation in PM held in Niigata prefecture, 29% responded, “I’d like to participate” and 29% responded, “N/A.,” while 40% responded, “I don’t want to participate.” Because there is also a holding example by a small number in other areas, we have inferred that there are needs of holding PM in Niigata enough and have initiated decision of a rule and an operation plan after that. Period II : We have held “Rakkura” for three times by fiscal year 2015 and had 25 participants. The meeting for gay men was held each “Rakkura” while the meeting for people regardless of their demographic information such as gender and sexuality was held only once at the first “Rakkura.” We received the positive responses such as “as expected” or “moderately as expected” from 76% of the participants about their impression after participating in PM.

Discussion : From the result of the survey questionnaires and repeaters’ existence, we conclude that the PM participants are satisfied to some extent. But there are patients who can’t participate in PM due to their privacy concerns. But because there is also a problem such as existence of people living with HIV/AIDS who postpones participation from anxiety to privacy, we have to challenge to create PM with more safety.

Key words : support for people living with HIV/AIDS, peer meeting